

# TIME SCENE

高制レーベンメントを  
上級時計市場を制す！

VOL. 2

ドイツ時計評論家G.ブルナーの最新時計リポート  
 「どのブランドが市場を制するか？」

2003発表の新スタンダード・

キャリバー徹底解剖

ショパール、ピアジェ…

トゥールビヨン工房

スイス現地取材

欲しい時計が必ず見つかる！

「66ブランド166モデル」

厳選カタログ

機械仕掛けの人形に命を与える

夢想のオートマタ製作者、

F.ジュノーの世界

今、人気沸騰の新素材

「ガルーシャ」って何だ？



# The Central Tourbillon H1 “Flying”

独創性の極み、センター・トゥールビヨンの作り手は  
遅咲きの“エリート”ウォッチメーカー

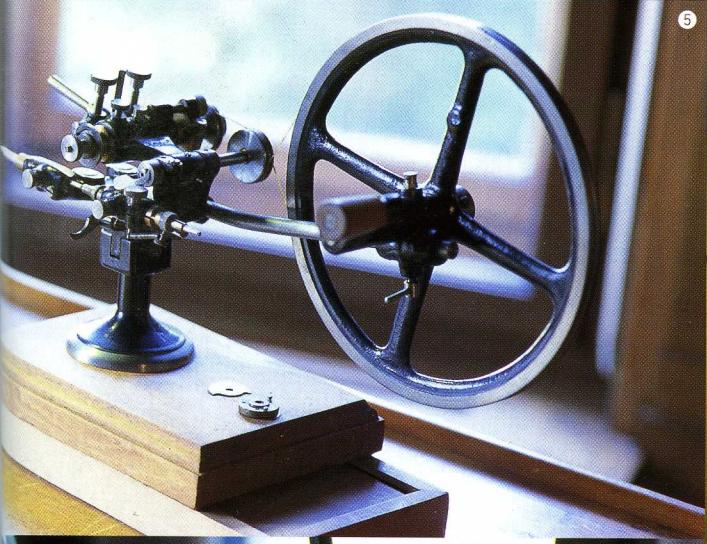
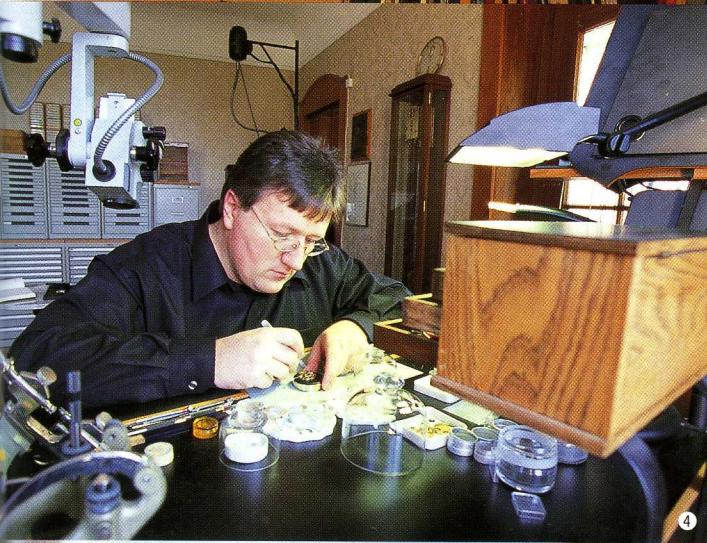
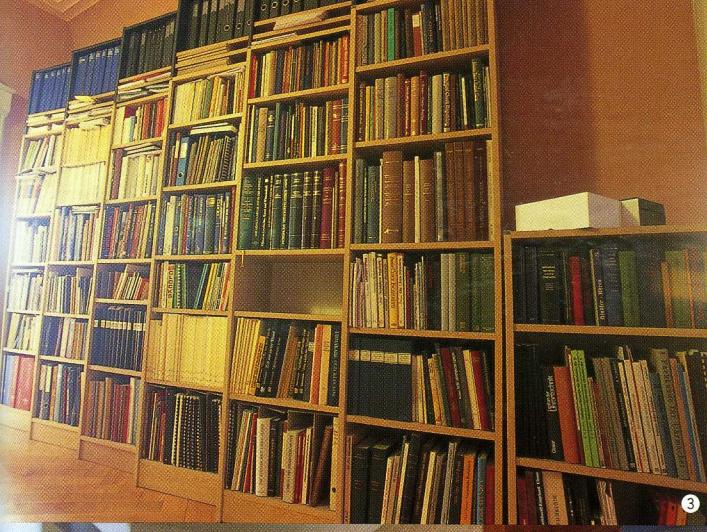
2002年のバーゼル・フェアで、独創的な  
センター・トゥールビヨンを発表したペート・ハルディマン。  
彼がどんな考えを持ち、どんな風にして時計を作っているのかを、  
スイス・トゥーンにある工房を訪ね、じっくり見て、訊いてきた。

Photo:TAKAHASHI Kazuyuki(PACO)  
Text:TSUNODA Jun

Part 3  
Profusion of  
Turbillon

H  
A  
R  
D  
I  
M  
A  
N  
N





スイス中部の街トゥーン。波穏やかなトゥーン湖が眼前に広がり、対岸には、ユングフラウから連なる、白い雪を頂いたアルプスの峰々が横たわり、間近に迫ってくる。そんな美しく静かな高台に、独立時計師ベート・ハルディマンの工房はある。広い庭も備えた住居兼用の一軒家。彼はそこで、デザイン、設計、組立などの工程すべてを、若い時計師とたつたふたりで行っている。新進時計師らしいコンパクトな体制だ。

いや、新進時計師と呼ぶのは少し語弊がある。確かに彼が腕時計を発表したのは、2002年のバーゼル・フェアが初めて。しかし実は、クロックの時計師として10年以上のキャリアを持ち、これまでにも素晴らしい作品を発表しているのだ。ではなぜもっと早くから腕時計を作らなかつたのか？ そこにはちょっとしたわけがある。

そもそもハルディマンは、時計学校を卒業してクロックとウォッチの修理の資格を取り、修理工の道を歩んでいた。ETA社やシュテューダー社での勤務を経て、トゥーンの時計修理士として'89年に入っている。ところがそこで過ごした2年間が、彼のその後を大きく変えてしまつたのである。

「私はその工房で、優れたマイスター時計師（スイス連邦認定の上級時計師）に出会い、非常に多くのことを学びました。今も目を閉じると、あの人の姿が昨日のことのようにはつきりとよみがえってきます。彼はその工房のオーナーでした。私は彼のもとで、アンティークから現代のものまで、クロックからウォッチまで、実際にさまざまな種類の時計の修復を行いました。その中で、高度な職人技や深い知識を身につけることができたのです。だから彼にはとても感謝しています。しかし

彼が教えてくれたのは、技術や知識だけではありませんでした。「時計の製作は一種の芸術である」ということも教えてくれたのだと思っています。芸術的な出来栄えのアンティーク時計に長く接しているうちに、いつしか自分もそのような作品をこの手で作つてみたいと思いつくようになつたのです」

そして'91年に独立。現在の地に工房を構え、自らのブランドも立ち上げた。しかし小さな成功するほど甘い世界ではない。彼はあまり多くを語らないが、独立直後はほとんど仕事がなかつたようだ。もしかしたら時計の修理の仕事で食いつないでいたのかもしれない。

しかし幸いなことに翌'92年、スイスの有名メーカーから仕事の依頼が来た。腕時計の、開発や特許技術の考案、プロトタイプの製作などをを行う仕事をある。もちろん彼はその仕事を引き受けた。

「当時はまだ若くて、食うや食わざだったのに、仕事ができただけでも幸せでした。合間に自分の研究ができたのもよかつた」

仕事ができたのは確かにラッキーだったのかもしれないが、引き受けに当たつて、彼は不利な条件を飲まなくてはならなかつた。自らのブランドの腕時計は一切作らないという条件である。腕時計の開発という微妙な仕事に携わる以上、仕方のないこととはいえない。彼にはつらい選択だったことだろう。結局そ

## Part 3 Profusion of Tourbillon



1964年スイス・ベルン州エメンタール生まれ。ゾロトゥーン時計学校卒業後、時計修理の資格を獲得。'86年からETA、その後シュテューダー社に勤務。'89年からトゥーンの時計宝飾店バンゲルタードで時計修復を担当。'91年独立。自らの工房を設立

て選択したのは、こうした理由からである。それでも彼は前向きだった。仕事の傍ら、腕を磨き、知識も蓄えて、「93年にはマイスター時計師の称号を獲得。またそのメーカーとの契約に抵触しないクロック、しかも難易度の高いレギュレーターの製作にも励んだ。そして'99年にセコンド・レギュレーター「スリーポツズ」を、2000年にはダブル・レギュレーター「レゾナンス」を完成させ、どちらもバーゼル・フェアに出品。特に後者は高く評価され、ラ・ショール・ド・フォン国際時計博物館から購入の注文も入つた。まわり

道はしたが、時計師としての地歩を着実に固めている。といったの

だ。

そして'01年には先述のメーカーとの契約が満了。晴れ

てハルディ

マンは、自由に腕時計を作ることのできる身となつた。

そこで、その前年から温めていた斬新なアイ

デアをもとに、1年という短い期間でプロト

タイプを作り上げ、翌'02年のバーゼル・フェ

アに満を持して出品した。それが、彼にとっての最初の腕時計作品となる、センターホ

ーリング・ケージ（直径31・58mmのムーブメント全体の実に2分の1以上という大きさ）を

配置するという斬新なレイアウトを採用して

いる。このよくなレイアウトは、独自の形狀と機構を持つた2番車を開発し、またリング状の極薄ホイールを9枚重ね、ケージをその

リング・ホイールの真ん中に持つてくること

で可能となつた。さらに2パーセ式のアンク

ルを使うことにより、ケージの設置スペース

も有効に利用している。

またトリプル・バレルを採用したこと、

トゥールビヨンのセンター配置に大きく貢献

している。3つの香箱のうちふたつを7時位

置と11時位置に置き、それらが、ボールベア

リングで固定されたトゥールビヨン・ケージ

を両脇から支えるという構造を探ることで、

フライинг・タイプでありながらも、動きを

安定させることに成功したのだ。また9時位

置に置いた第3の香箱が時針と分針を動かす

という画期的な構造になつており、しかもこ

の香箱は7時位置の香箱とリンクしているた

め、3つの香箱が一体となってスマートに駆

動しているのである。

つまり、ダイヤル・センターに大型トゥールビヨンをレイアウトすることで生じる動力

伝達上の問題点を、新開発した独自の2番車

と、トリプル・バレルとによって解消し、駆

動にかかる負担を極力排除しているのである。

このような画期的な機構は、当然ながら、

時計界で注目されることとなり、大手の時計

メーカー3社が、パテントを買い取りたいと

①工房は自宅も兼ねる一軒家の一部。②ダブル・レギュレーター「レゾナンス」は300年前に考案された機構をもとに作られていて、ふたつのムーブメントを作るのに4~5ヶ月かかるとか。現在はパソコンについで、精度を測定中。③時計史の本は時計製作のアイデアを練る際に参考にする。修理をしていたころは本をよく読んだが、今は将来の資料として保管。④細かな作業を黙々とこなす。彼の後ろに見える引き出しには、古い時計を修理するときのための古いバーツが保管されている。⑤⑥古い工具は単なるコレクションではなく、実際に使っているもの。古い工具を使うと、たとえ機能が同じでも、現在の工具とは出来上がりが違うという。作るものによって、しきりく工具が違うからたくさん必要なのだ



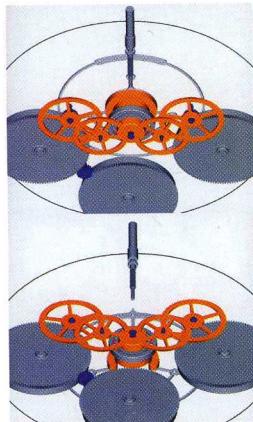
**HARDIMANN**

一軒家の1階、湖を見下ろす日当たりのよいこの部屋でハルディマンは主に作業をする。こちらは腕時計を作るための工具が並ぶ。もうひと部屋はクロック用

# Part 3 Profusion of Tourbillon



「ハルディマン H1 フライング」は、文字盤中央に、直径16.5mmという迫力あるフライング・トゥールビヨン・ケージを配置した斬新な顔を持つ。このようなレイアウトは、2番車の形状と機構に独自の工夫を凝らし、さらにリング状の極薄ホイールを9枚重ねることで実現した。ケース・バックからはトリプル・バレルが採用。パワーリザーブ38時間。手巻き。ムーブメントはオリジナルのCal.ZEN-A。18KPG、WGは890万円。Ptは980万円。



トリプル・バレルを採用し、7時位置と11時位置のふたつの箱がケージを両脇から支え、安定性を高めている。また、時・分針を動かす、9時位置の第3の箱が、7時位置の箱とリンク。輪列も左右対称に配列され、バランスが保たれている。

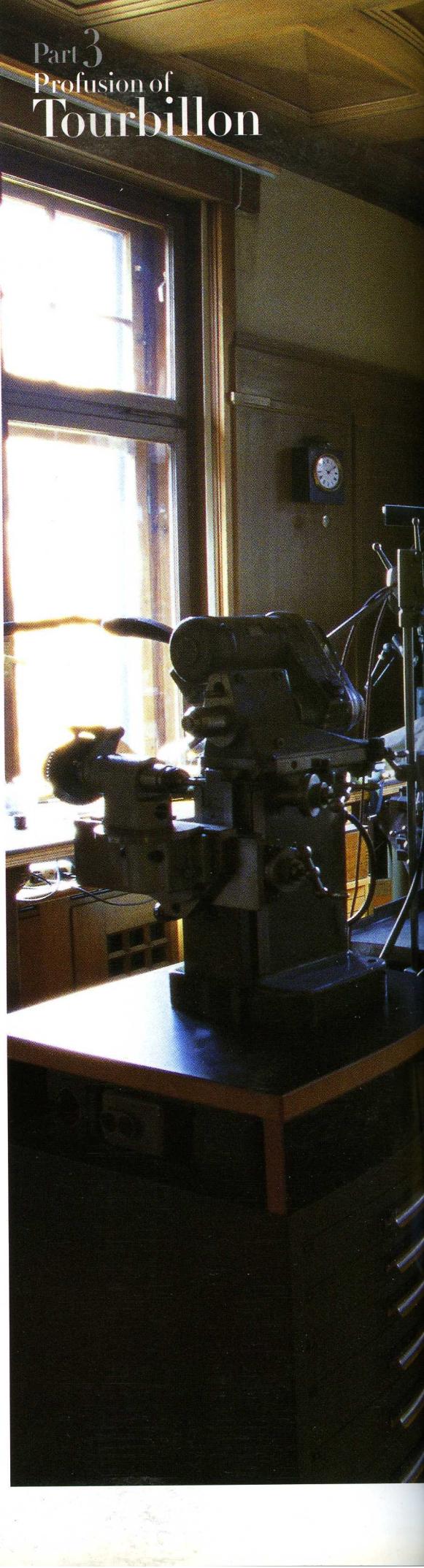
「私はブレゲの懐中時計の音が特に好きなんですね。だからH1ではその音をぜひ再現したかった。実際、かなり満足のいくものになつてあります。文字盤が前に出ているから、音もよ

り入れてきた。しかし、ハルディマンはどうのメーカーにも売ろうとはしなかった。  
「私は自分の時計を作り続けたいのです。時計師は皆、自分の時計を作ることに喜びを見いだすものなのです。だからブランドも機構も、だれにも売るつもりはありません」

H1は、斬新なデザインと機構に目を奪われながら、彼は「音」にもこだわっている。

「確かに『センター・トゥールビヨン』はこのブランドのひとつ柱にはなるでしょうが、それしか作らないわけじゃありません。バランスのものや、それとは全く違うものも作つていいたいですね」

彼は、時計について書かれた古い文献を丹念に読み込み、そこから斬新なアイデアのヒントをつかむのを得意とする。それは、かつてレストランの仕事をしていたとき、その参考にするために古い文献に慣れ親しん



だ経験をもとにしている。実際、センター・トゥールビヨンやダブル・レギュレーターを作る際には古書籍から多くのヒントを得たと。そんな研究熱心なハルディマンなら、5年とか10年という長いスパンで、人々をきっと驚かせる画期的な新作をまた発表してくれるだろう。